

主イエス様の三回にわたる出現

2007. 12. 11 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ルカの福音書 2章10節、11節

御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」

へブル人への手紙 9章26節

もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。

へブル人への手紙 9章28節

キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

ヨハネの黙示録 1章7節

見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。

聖書全体の語ろうとしていることは何かと言いますと、「あきらめる必要はありません。約束された救い主はすでに来られた」ということだけでなく、今も生きておられるお方で、再び近いうちにおいでになる」ということです。この動かすことのできない約束について考えると、希望が湧いてきます。

多くの人々は、「今の一時的な問題だけが解決されれば幸せ」と考えていますが、それは的外れです。主は、一時的な問題を解決することよりも、永遠なるものを与えて下さろうとして私たちに、悩み、苦しみ、病気等いろいろな課題をくださいます。しかしそれは、永遠なるものを与えるためです。

読んでいただきましたみことばの中に、この救い主の三回にわたる出現について記されています。

- *最初に、イエス様は「全人類を救うため」に、みどりごととして来られました。
- *第二番目。イエス様は主の恵みによって「救いにあずかるようになった人々を迎えるため」に、来られます。この時はみどりごととしてではなく、花婿として来られるのです。それは今日かもしれません。
- *第三番目。イエス様は「千年王国を建てられるメサイア」として、出現なさるのです。

私たちは、毎日この三つの出現について考えるべきではないでしょうか。ある兄弟が言いました。「私にとっては毎日がキリストの日です。自分のために来られたイエス様のことを考えれば、本当に嬉しくなります」と。

イエス様が来られた時、人々はいつも二つのグループに分かれました。イエス様の第一の出現について考えてみるとわかります。

今から約二千年前にイエス様がお生まれになられた時、イエス様のご降誕を心から待ち望んでいた人々がいました。それほど多くはなかったのですが、ある人々は、毎日「今日かもしれない」という希望を持って生活していたのです。

神様はみ使いを通して、アダムとエバに、すでにひとりの「救い主」が与えられることを約束しておられました。ですから、彼らがエデンの園から追放された時でも、希望を持っていたはずで、「あきらめる必要はない。私たちの罪の問題を解決するお方が必ず来られる」と。それ以来、自分に救い主の必要性を認めたすべての人々は、この「救い主」の出現を待ち望むようになったのです。

この約束された「救い主」の出現を待ち望んでいたすべての人々は、この方が出現された時、その方が自分にとってどういうお方であるかということを知ることができたのです。また、そのことを知ることができた人々は誰も、このお方を喜んで受け入れたのです。

しかし、悲劇的なことですが、大多数の人々は、「イエス様」を受け入れようとしなくて、拒んだのです。イエス様はこの事実について、次のように言われたのです。「彼らは光よりもやみを愛した」と。本当に残念なことです。

ヨハネの福音書 1章11節

この方はご自分のくじに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかつた。

「受け入れようとしなかつた」。つまり、悔い改めたくなかつたからなのです。

当時の人々は、「自分たちを、ローマの支配下から解放してもらいたい」と、救い主を待ち望んでいたのですが、「自分の罪を赦してもらいたい」という気持ちはなかつたのです。そのような人々は心の目が暗くされていたから、自分たちが罪を赦すお方を必要としているということが分からなかつたのです。

宗教的な指導者たちや当時の聖書学者たちは、「救い主イエス様」に全く無関心でした。

彼らによって惑わされた民は、悔い改めようとしませんでした。当時の王であるヘロデは、この方を殺そうと計画したのです。イエス様を待ち望まないということ、また、イエス様を求めないということは、「主を拒む」ことを意味します。そして、これほど愚かなこと、悪いことは他にありません。

真理はもちろん一つしかありません。イエス様は、「わたしそのものが真理です」と言われました。人間は真理であられるイエス様を真剣に求めるべきです。「求めよ。そうすれば与えられます」。

マタイ伝の中に、東の博士たちについていろいろなことが書いてあります。彼らは非常に遠い所から、「約束された救い主」にお目にかかりに来ました。何週間、何ヶ月間かかったか分かりません。彼らにとってエルサレムまで、ベツレヘムまで来ることとは、決して簡単ではなかったのです。しかし、彼らにとってこれほど大切なことは他になかったのです。ですから、彼らは真剣に真理を求めて長い旅をした結果として、「真理」をついに見出すことができたのです。求めるなら与えられる、と経験したのです。

彼らは、いったいどのような態度で主を拝したのでしょうか。

まず第一番目。幼子のような信仰をもって、

第二番目。まことのへりくだりをもって、

第三番目。心からの感謝をもって、

彼らは、このような心でイエス様にお目にかかったのです。

*第一番目。幼子のような信仰をもって、彼らはイエス様が自分たちのためにお生まれになられたこと、そしてイエス様がまことの救い主であられることを信じたのです。

それは理解できなかつたでしょう。けれど、素直に信じました。彼らは教養の深い人たちでしたが、これらのことを説明することも、証明することもできませんでした。しかし、彼らは信じたのです。

*第二番目。彼らはへりくだった人々でした。

そのことは、「博士たちが幼子の御前にひざまずいた」と書いてあるからです。ひざまずくことは、へりくだることです。自分たちの生活の中にイエス様を直ちに受け入れることをしない人たちのことを思うと、本当に悲しくなります。また、この最も大切な決定を、先へ先へと延ばしている人々のことを考えると、本当に可哀想だと思います。

*第三番目。当時の博士たちは、幼子のような信仰をもち、また、まことのへりくだりをもっていただけではなく、心からなる感謝をもって、主を拝したのです。

彼らの感謝のしるしは、彼らがささげた贈り物を見ると分かります。彼らは自分たちの持っている最高のものを主にささげたのです。強制されたからではありません。自発的に

ささげました。

私たちもまた、私たちの救い主となられるために天の栄光をすべて捨てて、お降りになられたイエス様の前にひざまずき、感謝しようではありませんか。

ルカ伝をもう一度読みましょう。

ルカの福音書 2章10節、11節

御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」

罪の重荷から解放してくださる、約束されたお方です。イエス様のお名前そのものは、「神は救いである」という意味です。イエス様は救いをもたらすために来られました。

「救い」とは、どのようなことなのでしょう。

聖書の中に多くの事が書かれていますが、その一つは、イエス様は「罪の債務からの救い」をもたらされたということです。天の使いが言いました。

マタイの福音書 1章21節

「その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」

一時的な問題を解決することよりも、イエス様は私たちを罪から救うお方です。イエス様だけが人間の罪を赦す権威を持つお方です。ルカ伝7章に、罪ある女についていろいろなことが書いてありますが、イエス様は言われました。

ルカの福音書 7章48節

「あなたの罪は赦されています。」

そのことばを聞いた人々は、びっくりしました。

ルカの福音書 7章49節、50節

すると、いっしょに食卓にいた人たちは、心の中でこう言い始めた。「罪を赦したりするこの人は、いったいだれだろう。」しかし、イエスは女に言われた。「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

*第一番目。イエス様は、罪をお赦しになるお方です。

何年前か前、ある病院まで行きました。彼は癌にかかったまだ若い方（たぶん65、6歳）でした。いわゆる共産主義者で、マルクスの理念、教えこそが世界を癒すものだと思っていたのです。

マルクスという男はドイツ人でした。よく聖書を勉強した男で、聖書学部を卒業したの

です。そして、ソ連のレーニンと親しくなり、二人は「みなさん、宗教は麻薬です。避けるべきです。宗教によってだまされたら大変ですよ」と。マルクスはなぜそのように思うようになったかと言いますと、使徒行伝を読んだからです。五旬節の時、三千人の人々は悔い改めて、イエス様を信じてみんな一つでした。つまり、悩みが解決され、みんな一つになったのです。一つの大きな家族になり、みんなお互いの面倒をみました。マルクスは、「これこそ素晴らしい社会です。こういう社会を作りましょう」と思ったのです。しかしなぜ失敗したかと言いますと、使徒行伝の初代教会は聖霊によって生まれたもので、人間がつくる社会は不完全そのものです。成功するはずはありません。

この教えをまず信じ込んでしまった男(共産主義者の癌患者)は、これこそと思ったのですが、病気になり、孤独になりました。そして、病床でイエス様の福音を聞いた時、心を開いたのです。奥さんはずっと彼の救いのために祈っていました。私たちは、病室では話すことができませんでしたので、病院の食堂へ行きました。食事のない時間帯でしたから、食堂には誰もいませんでした。祈っているうちに、彼は急に泣くのです。男が泣くのです。奥さんや娘さんの前で、大きな声で泣いて涙を流したのです。みな、びっくりしました。すると「いや、喜びの涙だよ。イエス様は私の罪も赦してくださったから嬉しい」と言ったのです。

ルカ伝に記されているこの罪ある女は、「あなたの罪は赦された」とイエス様のことばを聞いたとき、瞬間的に過去の生活を忘れたのです。「赦された」、これこそ最高の喜びではないでしょうか。釈迦も日蓮もそのようなことを誰にも言ったことがありません。もちろん、それを言える権利がないからです。「イエス様の救い」とは本当に素晴らしいものです。

*二番目。イエス様は、「罪の力」からも解放してくださるお方です。

パウロはイエス様を信じ受け入れたのですが、なかなか「自我」から解放されなかったのです。ローマ書7章の中に、二十何回も、「私」、「私」、「私」ということばが出てきます。そうするとうまくいくはずはありません。

ローマ人への手紙 7章24節、25節前半

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

別の箇所ではパウロは、『私たちは、…圧倒的な勝利者になる。(ローマ書8：37)』と。自分で立派になったからではありません。力持ちになったからでもありません。私たちを強くしてくださる方によって、です。

*三番目。イエス様は、罪ののろいを取り除かれるお方です。

そのことはイエス様だけがおできになります。ですから、パウロはガラテヤ書3章13節に書いたのです。

ガラテヤ人への手紙 3章13節前半

キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。

イエス様は、代わりにのろわれてしまいました。

*四番目。イエス様は、死の恐れからの解放をもたらすお方です。

安心して死に向かうことができることは、死の恐れに対する素晴らしい解放ではないでしょうか。そのためにイエス様は来られました。ヘブル人への手紙の2章14節と15節、よく引用される箇所です。次のように書かれています。

ヘブル人への手紙 2章14節、15節

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

「いつでもいい。いつ死んでもいい」と言える人は、本当に幸せです。

四国のI姉妹は非常に元気な姉妹でした。彼女もやはり癌になりましたが、もちろん行く先は決まっていると分かったのです。けれど、自分の葬儀では、もう自分はいないから誰も来なくてもいいと思い、「生前に葬儀をしましょう」と。友だち、知人、みんな誘ったのです。「私の葬儀のために誰も来なくてもいいですから、生きているうちにしましょう」と。そしてたくさんの方々が来ました。大きなテーブル、花も山ほどありました。もちろん、本人もピアノを弾いたり、証もしました。本当に楽しい時間を持ちました。後に彼女が召されたとき、またみんな来たのです。みんなが二度も福音を聞いたのは、やはり彼女の気持ちでした。つまり、「死の恐怖」から完全に解放されていたからです。

*五番目。イエス様は、来たるべき神のみ怒りからの救いをもたらされたのです。

確かに、「罪を犯したたましいは死ぬべし」。意味は、「裁かれるようになる。死んでからみ怒りが来る」ということです。けれども、生きている間にへりくたれば、悔い改めれば、み怒りから救い出されるのです。

ヨハネの福音書 3章36節

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。

「御子に聞き従わない者」とは、「御子を信じようとしないう者、求めようとしないう者」です。ですから、多くの人々が自分の死について考えようとしないうのは、悲劇的なことでしょう。

*第六番目。イエス様は、いつも逆らう自己からの解放をもたらしたお方です。

私たち信じる者にとって最も大切な箇所は、ガラテヤ2章20節です。勝利の秘訣です。
ガラテヤ人への手紙 2章20節

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」

「私はキリストとともに十字架につけられました」。もう死んでしまった。変なことを言われても、悪口を言われても、死んでしまったのだから関係はない、と。

マルチン・ルターは面白いことを言いました。「悪魔が誘惑するために、よく玄関まで来るのです。けれど、私がドアを開けると危ないので、私はいつも、イエス様に頼むのです。『あなたが玄関に行ってください。そうすれば、悪魔は逃げてしまいます』」。このような態度を取ることが、最も大切なのではないのでしょうか。

*第七番目。イエス様は、今の邪悪な世からの解放をもたらしたお方です。

ガラテヤ人への手紙 1章4節前半

キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。

ここでは複数形になっていますが、単数形で読んでもいいでしょう。「私の罪のために、イエス様はご自身をお捨てになった」と。これは考えられない恵みではないのでしょうか。この完全なイエス様の救いを自分のものとして体験した人は、誰も心から喜ぶことができます。

クリスマスのために一番適切な福音書は、おそらくルカ伝でしょう。ルカは、ユダヤ人ではありませんでした。異邦人(ギリシヤ人)でした。職業は医者でした。

このルカ伝1章には、三つの讃歌が載っております。一つはエリサベツの讃歌、もう一つはマリヤの讃歌、そしてもう一つはザカリヤの讃歌です。

ルカ伝2章には三つ、御使いの賛美、羊飼いの喜び、そして二人の老人、シメオンとハンナの証しが、載っています。この三人全てのものは、喜びに満ちあふれていたのです。全てこれらのものは、イエス様への感謝であり、主に対する賛美です。

パウロは歓喜の声をあげて書いたのです。

テトスへの手紙 2章11節

…すべての人を救う神の恵みが現われ、

これはクリスマスそのものです。御使いの知らせは、「恐れるな。見よ。全ての民に与えられる大きな喜びをあなたがたに伝えるために来た」と。

御使いたちの知らせを聞いた時に、羊飼いたちはどのような態度をとったのでしょうか。彼らは、「さあ、行って、見て来よう」と互いに話し合ったのです。この態度はどういうものであったかといいますと、幼子のような信仰、そして直ちに従うこと、それから喜ばしい確信でした。彼らの幼子のような信仰は、彼らには何が起こったのかはつきり分からなかったのですが、それにもかかわらず御使いのことばに従った、ということの中に表われています。彼らはいろいろと考えることをせず、直ちに御使いに従って、大急ぎで出かけたのです。喜ばしい確信について次のように書いてあります。

ルカの福音書 2章16節

そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。

2章20節

羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

と記されています。イエス様は、約束されたお方だけではなく、本当に来られたお方です。

では、イエス様はなぜ来られたのでしょうか。

キリスト教をつくるためではなく、死ぬためにだけ来られたのです。この「犠牲」とは、どういうものであったか、信じる者とされた私たちが天国へ行ってから初めて分かることと思います。イエス様の持つておられた栄光を見ると、言語に言い尽くすことが出来ないと思います。そしてイエス様はその全部をお捨てになられたのです。私たちのような者を救うために。

*第一番目。イエス様は全人類を救うために、みどりごととして来られました。

*第二番目。イエス様は救われた人たちをご自分に迎えられるために、花婿として出現なさいます。

ヘブル書9章26節。もう一度読みます。

ヘブル人への手紙 9章26節

もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。

一つの新しい教えを宣べ伝えるためにではありません。罪を取り除くために、罪という問題を取り除くために、イエス様は来られました。このことばは、イエス様の先ほど考えた第一の出現のことを書いているみことばです。イエス様は、救いを成就するために来て

くださったのです。

マルコ伝の中の一番大切なことばは、10章45節でしょう。

マルコの福音書 10章45節

「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、
多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」

イエス様は、死ぬためだけにお生まれになられたのです。「イエス様の死」とは、人間の受けるべき天罰そのものでした。それからヘブル書9章28節です。

ヘブル人への手紙 9章28節

キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

イエス様は、待ち望んでいる人々を迎えるために、来られます。今のことばの中に、「罪を負うためではなく」ということばがありますが、これは「罪なしで」という意味です。ということは、イエス様が二度目に来られる時には、罪との関係の一切ないお方として来てくださいます。

しかしこの場合も、イエス様の前に人々は二つのグループに分かれるのです。取り去られる人もいますし、残される人もいます。誰が取り除かれるか分かりません。なぜなら私たちは、誰と誰と誰が救われているか分からないからです。本当に私ははたして救われているのか、と真剣に考えるべきではないでしょうか。よく聖書を読んでいるから、聖書の語っていることを信じているから、それで十分ではないのです。

イエス様は来られます。その時には、それは罪人を裁くためではなく、ご自分の花嫁である、「からだなる教会」をご自分のために迎えるため来られるのです。

イエス様のご再臨の目的はユダヤ人でしたから、空中再臨についてあまり話されなかったのです。公の再臨のためにお話しになられたのです。部分的にちょっとだけ話されたのです。たとえば、

マタイの福音書 24章40節、41節

「そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。」

これは、分けられる二つのグループのことを言っていることばです。ですから集会の中においても、どの人がどちらのグループに属しているかどうかということは、誰の目にも明らかではありません。ある人は、確かに生まれ変わりを体験しているように見えるかもしれませんが、実際はどうであるか分かりません。また逆にある人は、信じているかどうか

かはっきりしない人たちかもしれませんが、このような人たちの中にも、主が受け入れておられる人が沢山いるかもしれないのです。

結局人間には分かるものではありません。決定的に大切なことは知識ではないからです。砕かれた心を持つ人、「あわれんでください。赦してください」、そういう心構えがあれば、イエス様は必ず受け入れてくださり、決して捨てないと約束しておられます。

イエス様が二度目に来られる時には、すべてこれらのことがはっきりとされます。すなわち、イエス様が二度目に来られる時(空中再臨)に、主に属しているすべての人々(死んだ霊が主の霊によって生き返らされた人々)は、急に姿を消すのです。見えなくなります。その箇所は、テサロニケ第一の手紙ではないかと思えます。

テサロニケ人への手紙・第一 4章16節、17節

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

つまり、もうちょっとの忍耐です。私たちが永遠に主とともにいることを考えれば、どういふ苦しいことがあっても大したものではないでしょう。もうちょっと…。

イエス様の最初の出現の時に、「見よ」という注意を促すことばがありました。二度目のイエス様の出現の時にも、「見よ」、あるいは「聞け」という注意を促すことばが書かれています。

コリント人への手紙・第一 15章51節、52節

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

「私たちはみな眠ってしまうのではなく」とは、「みな死ぬのではなく」ということです。

なぜここに、「聞きなさい」ということばが使われているのでしょうか。

*一番目、「今まで以上に待ち望みの生活をしなさい」という意味です。

今イエス様を待ち望んでいない人は、不従順です。不従順は罪です。

*第二番目に、「今まで以上に主に喜ばれるような生活をしなさい」という意味です。

それは自分自身の気に入るようなことだけをするのではなく、また、人に気に入られるようなことだけをするというのでもなく、ただ主のみこころにかなうことだけをしなさい

という意味です。パウロは、自分がこのような態度をとったからこそこのように言えたのでしょう。

ガラテヤ人への手紙 1章10節

いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歡心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歡心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。

*第三番目に、まだ救われていない家族、親戚、知り合いのために、今までよりも祈り、かつ闘うことです。

イエス様は、私たちに応えようと待っておられるのです。私たちの祈りに対して応えようとなさいます。

主への待ち望みが、私たちの毎日の生活を決定するものでなければなりません。私たちが救われたことの理由の一つは、主を待ち望むためです。

テサロニケにいる人々は、長い間福音を聞いたのではありません。ただ三週間だけです。けれども、彼らはいろいろな悩み、苦しみを通して備えられた人々でしたから、聞いたことばこそ「欲しかった、必要だった」と思い、素直に悔い改めてイエス様を信じたのです。そして模範的な人々になりました。

なぜかといいますと、私たちは救われるために救われたのではなく、主に用いられるため、主に仕えるために救われたのです。更に、再び来られるイエス様を待ち望むために救われたのです。

イエス様が二度目に来られる時には、多くの人々が後に残され、齒がみをすることとなります。このような、引き挙げられるという体験をした人は、今までに二人いるのです。「羨ましい」と言っているかもしれませんが、その二人とは、もしかすると、黙示録の中に書かれています。それは、「現われる二人の証人」(黙示録11:3~7)です。彼らは、その時エルサレムで殺されます。おそらくそうでしょう。「罪を犯したものは死ぬべし」と書いてありますから。死を見ないで、そのまま天国に行った二人も例外ではないでしょう。

・一人はエノクという男です。

彼は死を見なかったのです。そのまま天に引き上げられました。ヘブル書11章に彼について次のように書かれています。

ヘブル人への手紙 11章5節

信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされました。

人々はエノクを捜したのですが、見つけ出すことが出来ませんでした。

・もう一人は、エリヤという男です。

彼も同じような体験をしました。列王記下の2章を読むと、次のように書かれています。

列王記・第二 2章15節から18節

エリコの預言者のともがらは、遠くから彼を見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている。」と言い、彼を迎えに行つて、地に伏して彼に礼をした。彼らはエリシャに言った。「しもべたちのところに五十人の力ある者がいます。どうか彼らをあなたのご主人を捜しに行かせてください。主の霊が彼を運んで、どこかの山か谷に彼を投げられたのかもしれませんが。」するとエリシャは、「人をやってはいけません。」と言つた。しかし、彼らがしつこく彼に願つたので、ついにエリシャは、「やりなさい。」と言つた。それで、彼らは五十人を遣わした。彼らは、三日間、捜したが、彼を見つけることはできなかつた。彼らはエリシャがエリコにとどまっているところへ帰つて来た。エリシャは彼らに言った。「行かないようにと、あなたがたに言ったではありませんか。」

人々はエリヤも捜しましたが、見つけることができなかったのです。主ご自身がエリヤを取り去られたからです。これと同じように、主の恵みによって救われたすべての人々が、一瞬のうちに取り去られる時に、後に残された人たちはこれらの人たちを捜し求めることになるでしょうが、ついに見つけることはできません。

今は救いの時です。もしイエス様を自分の救い主として受け入れるなら、今日これからでも、「新しい人生」と、「永遠のいのち」をいただくことができます。イエス様は、将来のことについて、素晴らしいことばを語られました。

ヨハネの福音書 14章2節、3節

「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかつたら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」

想像できないほど素晴らしいところなのでしょう。祈りの中で、イエス様はご自分のこの奥底を明らかになさつたのです。

ヨハネの福音書 17章24節前半

「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さつたものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。」

この祈りは必ず応えられます。

三度目にイエス様は、千年王国を建てられるメサイアとして出現されます。この出現については、前に話しましたようにマタイ伝の中に詳しく書かれています。たとえば、マタイの福音書 16章27節

「人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行ないに応じて報いをします。」

24章30節

「そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見ます。」

と。この第三度目のイエス様の出現の場合にも、「見よ」ということばが書かれています。前に読みました黙示録1章7節です。

ヨハネの黙示録 1章7節

見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。

その時、イエス様は、みどりごととしてではなく、花婿としてでもなく、約束されたメサイアとして来られます。すなわちイエス様にとらえられた人々、そしてイスラエルの民にとって、イエス様はメサイアとして来られます。しかし、すべて悔い改めたくない人々に対しては、もちろん裁き主として来られます。

その時、すべてのユダヤ人は、選民として、主をメサイアとして受け入れることとなります。将来のユダヤ人はみな救われる、とはっきり約束されています。

信じたくない、悔い改めていない多くの人々にとって、イエス様は最も恐るべき方になります。黙示録の中に書いてあります。

ヨハネの黙示録 6章15節から17節

地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」

これはほら穴の中での祈り会です。全く役に立たない祈り会です。なぜなら、これらの人たちは、救いのときに祈ろうとしなかったからです。裁きの時、急に「助けてくれ」と。しかし、時すでに遅しと言うべきです。彼らは祈っていますが、主なる神への祈りではありません。山や岩に向かう祈りです。したがってそれは何の価値もないものです。彼らは、小羊、十字架の上で犠牲になられた主イエス様の御怒りを、恐れています。また、彼らが

祈っても何もなりません。

詩篇の作者は、次のように書いたことがあります。

詩篇 2篇4節

天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。

と記されています。イエス様は、大いなるみ力と栄光のうちに再びお出でになられます。ひとたびイエス様とともに引き上げられたからだなる教会は、イエス様とともに一瞬のうちに天から降って来るのです。エルサレムは、その時世界の首都となります。

千年王国の特徴は、正義、平和、幸福、長いのちと健康、物質的な幸せ、などです。のろいは自然に取り除かれるのです。世界の国民の望んでいることは、イエス様の再臨によってのみ完全に成就されます。

最後にもう一箇所読んで終わります。パウロが殉教の死を遂げる前に書いた証しです。

テモテへの手紙・第二 4章8節

今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。

ですから最も大切なことは、主の再臨を待ち望むことなのです。

了